
俺の狂科学がこんなに最強なわけがない

白蜜印のメイド漬け

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺の狂科学がこんなに最強なわけがない

【Nコード】

N8456W

【作者名】

白蜜印のメイド漬け

【あらすじ】

生まれながらにして最強の魔術を持つ高校生、坂魔狂太郎。ありふれた日常を渴望する狂太郎にとって、この力は障害でしかなかった。そんな邪魔な力を狙って、本家の魔術師達が狂太郎を襲いかかる。「バカ野郎。これ以上、俺の日常を破壊させてたまるか」最強の高校生、坂魔狂太郎の戦いは始まった……！！

1 この世で最も強い高校生

坂魔狂太郎について。

彼と親しい友人に訊いてみた。

「狂太郎？ あー、あいつは最強。冗談抜きで最強だ。俺が狂太郎に出会った時も、あいつの周りには一千人の暴走族が土下座して謝ってたからな」

彼のクラス委員長にも訊いてみた。

「坂魔君？ 坂魔君はいい人ですよ。みんなは怖がっているみたいですが、彼はとても優しいんです。前も、私が先生に頼まれて教材を運んでいた時に、彼が一人で運んでくれたんです。三十冊の広辞苑を一度で」

彼の幼なじみにも訊いてみた。

「狂ちゃん？ あっ、いやっ、狂太郎！？ 別に、あいつとはただの幼なじみで……。はっ？ 関係じゃなくて印象！？ べべ別に、フツーなんじゃない！？」

デレた。

彼と全く面識のない先輩後輩にも訊いてみた。

「坂魔さんは……」

「やめろ！ 死に急ぐな！」

「坂魔様は……」

「それでいい。またあの力を使われたら終わりだからな」
人は彼の最強の力のこと、思い様々、口を揃えて言う。

あれは、魔術ですよ、と。

この内容を映した映像を見せられた張本人の感想は。

「何度も言わせるな」

彼は言う。

これは、魔術ではない、と。

『これは、狂科学だ』

その思いの丈を

正面でカメラを回す魔術師に向かって。

2 坂魔家の日常

何気ない一般家庭の朝。

家族で食卓を囲み、朝食を共にする。

そんな当たり前の幸せが、ここ、坂魔家にもあった。

姉の剣（つるぎ）の悩みと言えば、近頃、息子の狂太郎の帰りが遅くなってきたこと。

まあ、年頃の男なら、帰りくらい遅くはなるものだ。
むしろ、それぐらい元気であつてもらった方が嬉しい。

「と、剣姉さんは思うわけなんだが」

「ご飯の盛られた茶碗を渡しながら、剣は言った。

茶碗を受け取る狂太郎の手は怒りで震えている。

「わけなんだがじゃない。朝食に帰宅する高校生のどこが健全だ」
時刻は午前七時。

狂太郎が帰宅したのは、ほんの数十分前のことだった。

「相手は誰だ。天狗か。避妊はしたか」

天狗とは、お隣の娘さんのことだ。

幼なじみであるため、狂太郎にとってすれば、そのような対象にはならない。

「朝っぱらからヘビーなもんを食らわすな。それより、卵焼き焦げてるぞ」

奥のキッチンで黒い煙が上がっていた。出どころはフライパン。

弁当用の卵焼きを作っていたところだった。

「ああ、すまない。忘れてた」

剣はキッチンに戻った。後に続くように、狂太郎は冷蔵庫から岩海苔の入ったビンとタマゴを一つ持ってきた。

向かいのテーブルで朝食を取る。

ほっかほかのご飯にスプーン一杯の岩海苔を乗せ、その上に“溶き卵”を掛ける。醤油はいらない。岩海苔の味付けで十分なのだ。

「……あ、箸忘れた」

キッチンに目を向ける。剣がフライパンから焦げた卵焼きを剥がすのに苦戦していた。

力一杯、フライパン返しを使って奮闘していると、誤って焦げた卵焼きが床に落ちてしまった。

「……………」

すかさず、剣は焦げた卵焼きを掬ってフライパンに乗せた。

「よし、セーフ」

「アウトだよ」

「大丈夫だ。お前は最強だ。一万と八百の全ての魔術。その中に除菌の魔術があるからな」

「またそれか」

何気ない一般家庭の朝。

家族で食卓を囲みながら、朝食を共にする。

そこでの話の種に、必ず、その言葉が入ってくる。

「俺には、魔術なんかない」

“魔術”。

かつて存在したとされる代物。

現在には存在しないはずなのだが、坂魔家は滅びたはずの魔術を持っている。

「否定しても無駄だ。坂魔家は魔術一家だ。その血筋を持つお前にだって魔術はある」

剣は更なる追及をする。

「現に、お前は箸もなく溶き卵を作っただろう」

テーブルには、卵の殻すらなかった。

「それをどう説明する。物質変換と消滅の魔術を使ったからだろう」

「違うな。これは、魔術などではない」

狂太郎にとって、魔術とは。

日常を脅かす代物。

そのせいで、小中と悲惨な日常を送ってきたのだ。

だから、高校入学を機に決めたのだ。

魔術には関わらない、と。

だが、関わらないようしても、むこうは関わってくる。

離れようにも離れられない。こればかりは仕方ないこと。

しかし、だからと言って、そのまんま認めるわけにはいかない。

そこで、狂太郎は考えた。

魔術なんて忌々しい言葉を、もっと和やかにして置き換えよう。

そう、これは、科学。

現代でも証明のつく代物。

ただ、普通より少し特別なだけのこと。

坂魔狂太郎の科学なだけのこと。

「狂科学」だ」

3 美人な幼なじみの方程式？

剣は呆れていた。

「お前、今までの全てを科学で証明できると思っているのか？」

「狂科学とは、そういうものだからな」

ふふつ、と、狂太郎は誇らしげだった。

実の息子だが、時々、何を考えているのか分からなくなる。

剣の本当の悩みは、たぶん、これだ。

返す言葉もない剣をよそに、マイペースに朝食を済ませた狂太郎が席を立つ。

時間は七時半を回った。そろそろ家を出なければ、遅刻になってしまう。

別の椅子に立てかけておいたスクールバッグを取り、出かける準備に入る。

「いい加減、剣姉も諦める。魔術なんてものはない。あるのは、科学。そう、剣科学だ」

などと言いつつ、食器類をキッチンに運んで、弁当をスクールバッグに入れて、準備完了。玄関に向かい、扉を開けた。

「朝までには帰る。当然だ」

ボタン、と、扉を閉めた。

「朝までに帰る……か」

壁に吊されたカレンダーを見る。

「昨日も聞いたぞ、それ」

*

玄関を開けてすぐ、門の手に黒いショートカットの女の子を見た。

空庭天狗。狂太郎の幼なじみだ。

登校日の朝は、こうして門前で待っている。

「どうやら狂太郎に異性として好意があるようだ。」

「あ、狂太郎。遅いよ。」

「そっちが勝手に待ってたんだろ。」

振り払うようにして、狂太郎は門を通過する。

天狗は、先に行ってしまうおとする狂太郎の後に付いた。

「昨日も帰ってくるの遅かったけど、また魔術師と戦ってたの？」

「科学者な。それと、昨日じゃなくて今日だ。」

「狂太郎も苦労するねえ。魔術なんて持つてるばかりに。」

突如、狂太郎は後ろを振り返り、突き刺すように天狗を指差した。

「“狂・科・学”だ！」

結構、顔が近い。天狗はすぐさま引き下がる。

「分かった分かった！」

スクールバッグで顔を隠す。まったく、あんな距離で見たら、

心臓が止まってしまいそうだ。

「まったく……、本来なら美人な幼なじみと登校なんて非現実的な

シチュエーションすら許されないというのに……。」

ぶつぶつと愚痴をこぼしながら、狂太郎は前を進んだ。

そつとスクールバッグをどかす。

天然、なのだろうか。

(美人の幼なじみって……)

とは言え、心の中では、やっぱり嬉しかった。

狂太郎の後を歩くその足取りも軽かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8456w/>

俺の狂科学がこんなに最強なわけがない

2011年9月25日03時10分発行